

# これまでの調査

## 平成25年までの調査成果

灰塚山古墳が前方後円墳であることは知られていましたが、昭和61年に実施された福島県立博物館による測量調査によって学術的に紹介されました。測量の結果、長61.2mで自然丘陵を利用して築かれたことが判明しました。

東北学院大学辻ゼミナールでは、平成23年から平成29年まで7年間にわたって発掘調査を続けてきました。平成25年までの調査では、灰塚山古墳の墳丘がもともとの地形を利用して築かれていること、後円部の上には江戸時代の礫石経塚が営まれていること、礫石経塚の下層に埋葬施設が南北方向に軸をほぼ揃えて二つ存在することが分かっています。

## 平成28年度調査成果

昨年、平成28年度の調査では、後円部中央の第1主体部と後円部東側の第2主体部の調査を行いました。

第1主体部は南北に長い木製の棺です。木の棺は長い時間の中で腐ってしまい残っていませんが、棺の置かれた痕跡が粘土上に残されており、全長約8m超、幅約1.6mの大型の棺だったことが分かります。古墳に用いられる木棺として最も大きいものの一つと考えられます。組み合わせ式の木棺と見えています。

棺の内部には副葬品が残されていました。副葬品は青銅製の鏡、ガラス玉を綴った腕飾り、堅櫛群、大刀1振りなどです。青銅製の鏡は小型仿製鏡と呼ばれるものです。東北地方には類例はなく、西日本を中心に似た資料が知られています。堅櫛群は、大型の堅櫛と大小の堅櫛を組み合わせた特殊なものを順次遺体の上に置いていった状況を示しています。堅櫛を供える儀式の様子を知ることのできる資料は日本中探しても他にありません。大変貴重なものです。



第1主体部



青銅鏡出土状況



大刀、堅櫛群出土状況